

北陸新幹線福井駅 周辺整備に関する提言

平成30年4月

福井経済同友会

I 、はじめに、福井駅周辺の現状と課題

JR福井駅前を中心とする福井市中心市街地の活性化については、コンパクトシティ構想に基づき、同地区への公共投資と民間投資の促進が図られてきた。県と福井市においても県都デザイン戦略や福井市中心市街地活性基本計画等を策定し、長期展望に立ったまちづくりが進められてきた。

その過程で、JR福井駅東口にアオッサが、同じく福井駅前の再開発ビル「ハピリン」が完成し、福井鉄道延伸やバスターミナルの整備も図られ、一定の賑わいが戻りつつあるのも事実である。しかしながら、これをもってコンパクトシティが実現したという感覚は残念ながら持つことはできない。「ハピリン」完成は、これで中心市街地の活性化が終わったのではなく、これからが本格的なスタートというのが我々の正直な感想である。

福井駅からハピリン、西武百貨店に至る道路は人通りも少し戻ってきたが、一步裏に回ればコインパーキングとシャッターで閉ざされた店が続く。一部のエリアは夜の賑わいもほとんどなく、県都の駅前とは思えない閑散とした街になる。一方でハピリン開業後、全国的に名の売れた飲食店や、福井駅前北通りから県庁に抜ける通り、さらにガリレア元町通りなどでリノベーション等を活用した意欲的に新鮮な感覚の店の開店が相次ぎ、一部で夜の賑わいが戻ってきたエリアも見られるようになった。

それでも市民目線で見ると、「駐車場がない、あっても高い」「それほど魅力的な店がない」「街歩きが出来ない、楽しめない」「食品スーパーが少ない」「おしゃれ感がない」「深夜までやっている店がない」「公共交通機関のダイヤが少なく行きづらい」「何もしなくてもくつろげる場所がない」等々、この地区への市民の不満は少なくない。まだまだ、問題は解決していない。

一方、福井駅に降り立った来訪者の目線で見たらどうだろうか。ある県外客から直接言われた言葉である。「確かに改札口はひとつだが、改札を出て右に行けばいいのか、左に行けばいいのかわからない」「街中の案内表示が少なく歩きづらい」。確かに都会ではJRだろうが地下鉄だろうが改札を出れば「〇〇方面はこちら」とかいった案内板が必ずある。単なる番地名だけなく主要なホテルや施設名なども明記されている例が多いし、多言語対応もされている。

JR福井駅のバスターミナル側には一応バス路線図と共に周辺地図や主要な観光案内はあり、多言語表示もされてはいるが、来訪者の目線で見た時、分かりづらい。さらに目的地に向かって歩いて行った場合のフォローの表示も少ない。国体も間近に控え、おもてなしの在り方を来訪者目線で早急に見直すべきではないだろうか。

県都・福井市のコンパクトシティ化がなかなか進まない大きな要因のひとつには、まず大型ショッピングセンターが車社会の進展の中で郊外に多く立地し、これにつられて様々な行政のハコモノが郊外展開され、福井市は目一杯分散化した街となった。それが少子高齢化、人口減少の中では逆に交通弱者にとって真に住みづらい街となり、行政サービス上も極めて非効率な街となり、商店街でのシャッター通りに加え、一部住宅地では空き家が目立つようになったという寒い現実が見え始めた。

この危機を乗り切るために街のコンパクト化をどう進めるのか。大切な視点はまずはこれ以上分散化させないということであり、新たなハコモノや古くなった行政施設のリニューアルは、まず福井駅周辺の中心市街地に集約することである。行政や民間も含めてこれまですべて“点”で展開されてきた様々な施設や機能を、歩ける範囲で“線”として結び、そして“ゾーン”化していくことにある。

「歩行空間は文化空間である」と言った識者もいる通り、人がそぞろ歩く空間はその都市の文化を形成していく。ドアツードアの車社会はいかに便利であってもそこに福井らしい文化は生まれない。来訪者目線ではそれは一層顕著となる。いずれにしても行政がこれまで策定してきた都市計画を一部見直すべきは見直し、北陸新幹線福井開業まで必要なことを早急に実現することが今求められていることではないかと考える。

II、福井駅周辺地区が目指すべき方向性

【本提言の狙い】

多くの課題が残されている福井駅前、及び福井駅周辺地域であるが、今一度我々が喚起しなければならないことは北陸新幹線福井開業までまさに待ったなしの状況にあるということである。考えるべき視点は、それまでに早急にやらなければならないこと、一方で、開業後約5年後を目途にした中長期展望、その2つの視点で分けて考えることではないか。そしてその2つの視点の先にあるものは、北陸新幹線福井駅と本県への交流人口をより促進させ、北陸新幹線福井開業効果を一過性のものに終わらせることなく、ふるさと福井の恒久的な発展へつながるものでなければならないと考える。

よってこの提言の本論は、北陸新幹線福井開業までに我々がやらねばならないこと、開業後5年ぐらいまでにはやらねばならないことに分けて構成されている。まちづくりについては、百人いれば百人の案が出てくるぐらい人それぞれの目線で大きく違うことは重々に承知している。また、福井駅周辺と他地域の連携、バスも含めた公共交通機関の在り方、あるいは中長期展望では県庁や福井市役所移転問題、新たに建設される福井市文化会館の位置づけ、古くなった大型ビルのリノベーションなども含めた都市機能のゾーニングの在り方など一部見直すべき部分も出てきている。

しかしながら北陸新幹線福井開業に間に合わせるとの我々の統一した考え方のと、とりあえずやらなければならないことを最優先し、福井駅の西口、東口に降り立った来訪者が見るべき光景、見て欲しい景色を具体的にイメージすることを重視した。その意味で文字通り、絶対にやらなければならないことだと考える。

もちろん「いや、こうした方がいいのではないか」「こんな視点もあっていい」といった関係機関や市民間の議論を大いに期待する。ただし、それは早期に意見集約を図るべきことであることを重ねて強調したい。我々には時間がない。このため福井市中心部の浜町や片町といった他の地域、あるいは足羽川河原や足羽山、さらには福井市郊外の地域も含めた地域間連携といった様々な広域的な観点については、この提言を契機に今後の関係機関の議論の活発化に期待したいと考えている。

A、新幹線開業までにやるべきこと

- 1、西口と東口の役割分担
- 2、交流人口を促進する具体案
- 3、駐車場およびパーク&ライドの推進

B、新幹線開業後、5年程度を目途にやるべきこと

- 1、県庁移転の計画立案と早期実施
- 2、郊外投資抑制施策の実施
- 3、公共交通ネットワークの再構築とまちづくり

A、新幹線開業までにやるべきこと

A-1、東口と西口の役割分担について

福井駅の東口と西口は、西口に恐竜が置かれていることでなんとか差別化されているが、仮に恐竜を除けば、西口は左手にハピリン、東口は右手にアオッサが建ち、似たような光景が広がっている。違いを挙げれば、西口が賑わいがあり、東口は静かな印象である。

また、西口の恐竜が他の県都の駅前との差別化を演出しているのは評価できる。観光客の人気も高く積極的に恐竜をもつといかすべきだと考える。

北陸新幹線福井駅が開業するのに合わせ、この東口と西口の雰囲気を一新させ、それぞれの役割分担を明確にした都市機能と都市景観の強化による賑わいの創出を提言したい。ポイントは東口、西口それぞれに福井らしい雰囲気や都市景観を作り出し、これに合わせて都市機能を整備することである。

1、東口が担うイメージ

北陸新幹線の乗降客を意識した「北陸新幹線福井駅」にふさわしい、福井らしさを前面に出したまちづくり。

(1) 奥越、坂井エリアも含めた広域観光ターミナル機能を担う。
その象徴として恐竜広場を構築する。

朝倉氏遺跡、永平寺、恐竜博物館、東尋坊、芦原温泉、観光客を本県屈指の観光地に誘う街づくりを展開する。

(2) 教育・文化の玄関口としても再定義し、市民の交流を促進する。

2、西口が担うイメージ

県都福井を象徴する玄関口としてブラッシュアップする

- (1) 駅前再開発ビル構想を活かし、ビジネス街と官公庁街としての機能性を追求するまちづくり
- (2) ファッション・食をテーマとするまちづくり

3、東口に恐竜広場、西口にモニュメントでイメージをがらりと変える

東口、西口それぞれに福井らしさを活かし、それぞれの役割を出来るだけイメージしやすいようにする。

以下に我々なりにあくまで一例として考えた案を示す。いずれにしても県都福井の象徴として西口モニュメントは必要と考えている。仮に、東口の恐竜広場の設置が都市計画上困難な場合は、現状の西口に設置されている恐竜像はさらに拡充し、植樹も増やし、広場化する。限られた用地の範囲で課題は多いと思われるが、本県の有力な観光コンテンツである恐竜をさらに活用すべく、これを機会に各方面の検討をお願いしたい。

3-1、東口の恐竜広場に関するイメージ

《恐竜広場の設置》

西口とはがらりと雰囲気を変える。その役割をまず担うのがこれまで西口にあった恐竜、これを恐竜広場として再整備し、恐竜像も増やし、楽しい賑やかしさを演出。人が集まる、観光・文化・教育のエリアを創り出す。

- 緑豊かな恐竜広場を新たに設置、新幹線のホームや車窓からも見えるように2階建てまたは一部2階にする
- 広場から駅舎やアオッサに至る通路にも小さな恐竜像を設置、勝山の恐竜博物館の玄関口としてのえちぜん鉄道福井駅との一体感を演出する
- 広場の1階には県立恐竜博物館サテライトスタジオを設置
- 恐竜博物館の展示物がVRで再現され、勝山に足を運びたくなる効果を狙う

3-2、西口のモニュメントに関するイメージ

《虹をイメージしたアーチ式モニュメント》

ハピリン、バスターミナルの未来志向的なシャープなイメージと調和することを重視し、かつフェニックスに代表される復興、力強さと未来への希望を感じさせるモニュメントとする。夜の寂しい駅前の雰囲気を一新させる役割も重視した。

- 現在、恐竜が置かれている場所とハピリン広場の西北角地にかけて大きなアーチ式のモニュメントを新たに設置
- 西口に降り立つと虹のようなアーチの向こうに通称三角州の再開発で建てられるであろうシティーホテルの高層ビルが見えるイメージ
- ハピリンのプラネタリュームの球体を太陽に見立て虹を駅前に描き、未来に向かって虹・アーチをかけ、不死鳥のごとく蘇った福井の新たなシンボルとする
- 色はハピリンに合わせてシルバー、または薄いシルバーピンク。
- 夜はこのアーチにプロジェクションマッピング技術を使って虹や福井らしい映像、桜並木やあじさい、さらに蟹等の産品を映し出して、夜の賑わいを演出する
- 新たなモニュメントは広く市民に協力を呼びかけ寄付を募る
- 寄付した市民の氏名はモニュメントの土台のレンガに彫り込み保存

A-2-1、おもてなしの感性がみえる街

(1) ビジネス客や観光客への利便性

- ① 福井駅前西口地区の案内図を見直し、県庁や市役所だけでなく、ホテル、百貨店、商店街や主要ビルの位置関係が一目瞭然でわかるようになる
- ② 近隣観光地である福井城址、養浩館、柴田神社、浜町、足羽川桜並木通りなどは、その方向をわかりやすいように表示し、辻ごとに→表示を徹底する
- ③ 駅前地区の食事処をエリアごとにデジタルサイネイジ(電子掲示板)で紹介し、その場で問い合わせや予約の電話が入れられるようにする

(2) 食の街、ファッショントリニティの街の充実

- ①市場とまでいかなくとも蟹や生鮮魚介が購入できる店舗を複数誘致するほか、福井の地酒が楽しめるワンコインコーナーを設置する。
- ②横丁、路地にできるだけ統一したジャンルの店を誘致し、「越前そば横丁」「ソースかつ丼通り」、あるいは精進料理・豆腐料理を集めた「永平寺通り」といった個性的なネーミングを付けてイメージを向上する。
- ③これら横丁は行燈を歩道に設置し緑化等で統一感を持たせ、視覚的な情緒感を演出する。
- ④金沢とくらべ駅周辺のファッショントリニティ関係の提供力が見劣りする。東口も含めて新たなファッショントリニティの集積を図る必要がある。

(3) 各再開発ビルに求める機能

現在、複数の中心市街地再開発計画が進行している。我々としてもこれら再開発計画が、福井駅前地区が県都福井として再生できる最後のチャンスであり、その計画の早期実現を心から期待する。一方で、これらビルにおいて以下のような機能の充実を要望したい。

(3)-1、高級ホテル機能とコンベンション機能

県外VIPが宿泊できる高級ホテルが残念ながら福井市には少なく、多くは金沢市に流れている。また、1千人前後のパーティーができるホテルも存在しておらず、パーティーや宴会を伴うコンベンションも金沢に流れしており、地元企業や各種団体の活動の制約要件ともなっている。

(3)-2、地元企業を支援する機能

オフィス機能に加えて、県内企業の製品が紹介できるようなショールームが入れるような機能があれば、単に事務所スペースに止まらない幅広い企業ニーズに応えることができる。

(3)－3、“スタート・アップセンター”の設置

スタート・アップ企業に限らず、事業継承が困難な企業をリ・スタートさせようとする地元企業らを集約し、若手経営者たちの交流を促進する。地元民間企業のグループで企画されている「こしのバレー構想」などの後押しにもなると考える。

福井での起業や事業継承が困難な企業をリ・スタートさせようと考えている人たちを対象に定期的に研修会やマッチングを行うほか、新しいビジネスモデルの提案を受ける施設、さらにこれら企業家にオフィスを提供する公設のインキュベートルームを設置し、国内、海外に情報発信する。このような施策でまちなかに若い起業家や経営者たちを集め、交流促進と賑わいを創出する。

(3)－4、若者達に深夜の居場所を提供する

若者達が深夜まで楽しめるアミューズメント機能、例えばカラオケ、ボウリングなどのスポーツ施設、ミニステージ、プリクラ、軽食といった複合施設。

A－2－2、東口で観光面、教育・文化面での機能をより充実させる

(1)アオッサの機能充実

- 市立桜木図書館をさらに2フロアにスケールアップし、簡単な軽食コーナーなども新たに設置してより充実させる。
- 児童館も規模を拡大し、子育て世代の若い両親が子供を預けてショッピングを楽しむといったような多様なニーズに応えられるようにする
- これら施設の運営の民間委託も検討し、今以上の平日や休日の深夜営業の実施等で利便性を図る。他県ではTSUTAYAへの委託などで成功している事例は少なくない。
- 県内大学の大学連携センターでの合同講座や研修をさらに充実させるほか、北陸新幹線を活用した他県の有名大学の市民講座などを充実させ、学生や学習意欲の高い中高年の交流人口を増やす。
- 郵便局、パスポート発行・更新、サテライトハローワーク(仮称)など公的な窓口機能を誘致し、交流人口の拡大につなげる
- 国際交流センターの移転、外国人在住者にとっても公共交通機関に近く、図書館や児童館もある東口の方が利便性も高い。

(2) 福井市文化会館に関して

①文化会館への動線の確保

新たに建設が予定されている福井市文化会館の利用を考えた場合、できれば公共交通機関を使った利用促進を図るべきである。そのため東口からの動線の確保、特に雨天時でも利用しやすいようにアーケードはもちろんのこと、動く歩道なども検討すべきではないか。“点”から“点”をつなぐ“線”を作るべきであろう。

②文化会館と一体化したリバーサイド公園整備

東口への交流人口拡大のため、文化会館の南東側に荒川の流れを活かしたリバーサイドパークを建設する。福井地方気象台の移転等も必要となるかもしれないが、荒川水門と荒川の流れを活用してボートを浮かべるといった遊び心、また水門の見学コースなどもあっていい。文化会館を単独の文化施設ととらえるのではなく、市民の憩いの場を造形し付属させることで、“点”から“線”をさらに“面”へと拡大する視点があってもいいのではないか。

(3) 観光の玄関口、広域観光ターミナルとしての機能充実

前述したような恐竜広場などで「福井に来た！」感を演出する一方で、インバウンドを含めた観光客をおもてなす機能の充実を図るべきである。えちぜん鉄道の福井駅もいかし、朝倉氏遺跡や永平寺、奥越観光、芦原温泉・東尋坊といった観光地の出発点としての機能を備える。

(3)-1 観光案内の充実

- 西口も含めて目立ってわかりやすい多言語対応の近距離案内表示
- 嶺北全域の広域観光案内版と交通体系の表示
- 高速バスも含めたバス乗り場や観光タクシー乗り場の案内表示

(3)-2、大型バスの待機場の整備

各種ツアーや大型バスの発着場が駅周辺に必要である。また、観光や各種イベント等で利用する大型バスの待機場も必要で、福井市文化会館の建設により、そのようなニーズはより高まる。北陸新幹線の高架下のスペースを利用してターミナルを整備してはどうか。

(3)－3 “レンタカー村”の造成

現状、北陸を訪れる多くの観光客がレンタカーを利用する際、金沢で借りて福井・富山を観光し、再び金沢に戻って宿泊するケースが多い。金沢独り勝ちの要因はここにもある。福井駅東口、恐竜広場の東大通に面した区域にレンタカーショップを積極的に誘致して集約化を図り、北陸新幹線福井延伸後のレンタカーニーズの拡大に備えるべきである。でなければ再び金沢起点一終点のレンタカー観光が続くことになる。

A－3、駐車場とパーク＆ライドの推進

福井駅前地区では駐車場が不足しており、料金も高いといった市民の不満はよく聞かれる。確かに何か大きなイベントがあった時、あるいは上京しようと一泊駐車を考えた時、駐車場探しに奔走させられた市民は多い。一方で、とりあえずパーキングにしておくとの土地所有者が多く、県都の街並みとは思えない光景が広がりだしたエリアもある。心が痛む市民も少なくない。こうした街並みが出現している中で我々は根本的に駐車場整備の在り方を見直すべきではないかと考える。具体的な4つの考え方を提案したい。

1、長期駐車ニーズに応える施策の実施

駅東口では北陸新幹線によってより高まる可能性のある長期駐車のニーズに応える高層民間駐車場の整備を進めるべきで、そのための行政の助成措置などを駅東口を対象に立案・実施すべきではないか。

2、都市再開発と連動した小規模パーキングの集約化

駅西口地区では、百貨店やホテル、商店街の利用者を想定し、虫食い状態の小規模駐車場を再配置して集約化を図り、高層駐車場として再整備すべき時ではないか。地権者の利害調整など難しい面は多々あるが、この地区で中心市街地再開発計画が複数走っている今がその好機であり、再開発の行政認可に際してそのような指導を検討すべきと考える。

3、ICTを活かした駐車場の効率活用と賑わいの創出

Free Wi-Fi網をさらに充実させ、Beacon位置情報システムを使って駐車場の空き情報、さらには店舗情報や観光客向けの観光史跡情報などを流し、まちのなかの賑わいを創出する。

混雑時にぐるぐる回遊する車が多くみられるが、他県の都市圏で見られるような駐車場の稼働状況を示すような電光掲示板もなく利用者の混乱と不満を醸成している。また、関係者も努力されていることは認めつつも、もっとショップ情報やグルメ情報、観光情報が発信されてもいいと思われる。経済産業省の助成事業「地域・まちなか商業活性化支援事業」なども活かしてそのようなICT(※)を使ったにぎわい創出も考えられるのではないか。

※ICT Information and communication technologyの略で情報通信技術のこと

4、パーク&ライドの推進

福井駅を中心とした公共交通ネットワークは充実してきたが、車から鉄道にシフトさせるまちづくりも忘れてはならず、沿線の駅に設置されているパーク&ライドの駐車場も、今後の整備拡充が望まれる。また沿線の駅近辺へ郊外にすでに設置されている公共施設の移転、民間事業者の誘致を図つていき公共交通ネットワークの稼働を上げるよう促すべきである。

B、新幹線開業後、5年程度を目途にやるべきこと

B-1、県庁移転の計画立案と早期実施

すでに我々は平成27年3月に、福井県庁の早期移転と跡地にコンベンション施設の建設を提言した。その後、県庁移転の議論が活発化し、跡地の活用はともかくとして、県庁早期移転は県民の総意になりつつあると考えている。したがってこの提言においても引き続き平成27年の提言を踏襲するものである。ただ、移転の時期、さらに移転先、跡地活用に関連して新たな方向性を提示したい。

(1) 移転の時期

～新幹線開業から5年以内には実現～

できるだけ早期にと要望したいが、少なくとも北陸新幹線福井開業までには具体的な計画を立案し、開業5年後ごろには移転を完成させるように方向性を示し、それに関連する民間投資を誘発するように動くべきである。

(2) 移転の場所

～複数の既存ビルを繋いだリノベーションもあり～

県庁はどこに移転すべきか。前回の提言で触れた新栄商店街周辺地域では、その周辺に中心市街地再開発計画の動きなどもその後出て来ており、むしろこれを優先させるべきと考える。現時点では交流人口の活発化を考えれば福井駅前地区ということになるが、その際、ひとつの考え方として複数の既存ビルのリノベーションという観点もあっていいのではないかと考える。

すでに駅前地区で複数の中心市街地再開発計画が動き出している。これが仮に実現した時、駅前地区のオフィス機能は明らかにキャパオーバーになる可能性がある。既存のビルからの移転・撤退がこれ以上加速するとがら空きのビルも出てくる。

このような中古ビルを大規模にリノベーションし、その活用を図れば行政機能の効率化は維持されるし、公共機関におけるリノベーションの成功事例として全国に知られることになるかもしれない。現在日本全体がかつての公共事業のリニューアル期を迎えており、その予算措置が借金財政下で国家的な課題となっている点でも本県の先進的な取り組みは大いに注目されるのではないか。

(3) 移転の跡地

～コンベンション機能の統廃合の検討を～

県庁移転後の跡地の活用については、引き続き交流人口をこの地区に呼び込むとの観点からスポーツイベントも含めた多様なニーズに対応できるアリナータイプのコンベンション施設(5千人規模程度)が有望だと考える。ただ、この場合、福井市におけるコンベンション施設のスクラップ＆ビルトを合わせて実施することが極めて重要である。

この際、既存のコンベンション施設(フェニックスプラザや産業会館等)との機能分担、統合・廃止を果敢に実行すべき時であろう。県、市双方の連携、そして俯瞰的な目線であらたな県都福井のコンベンション機能の再構築を是非とも期待したい。

B-2、郊外投資抑制施策の実施

福井市のコンパクトシティについてはすでにコンセンサスを得ており、高層マンションと一体となったハピリンの建設など、都市機能を集積し中心部の居住性を高める試みが進められている。しかしながら、依然として都市機能は分散されたままであり、ドーナツ現象に歯止めがかかったとは言い切れない。

我々としては、この提言に盛り込んだような福井駅周辺への交流人口増化策としての様々な施策や機能の整備の実施を要望する一方でこれを機会に福井市郊外におけるいわゆるハコモノの公共施設の設置を抑制し、さらに中心市街地に“スタート・アップセンター”のような民間投資を呼び込む施策の立案・実施まで踏み込むべきではないかと考える。自由経済の日本で難しい点は重々承知しているが、地方行政としてのやれる範囲で以下のような施策の展開も検討すべき時期に来ているのではないかと考える。

郊外抑制施策の導入

平成29年3月に福井市立地適正化計画が定められた。計画区域内においては、生活拠点などに福祉・医療等の施設や住宅を誘導し、再配置および集約することを強力に進めるとしている。しかし、これらは基本的に市街化区域内に関するものである。例えば郊外に立地した公共公益施設の再配置や郊外への移転は原則として認めないと具体的な郊外の抑制を図り、それぞれの地域拠点のコンパクト化を図る必要がある。

すでに行政側ではそのような認識を待たれていることと思うが、一歩進めて基本の方針として公共施設投資の郊外抑制、中心市街地への投資集中を具体的に打ち出すことで民間も巻き込んだ郊外投資抑制効果が生まれることを期待したい。

＜郊外抑制施策の事例＞

・都市の成長管理政策(アメリカ オレゴン州ポートランド都市圏)

「都市成長境界線(UGB:Urban Growth Boundary Line area)」を導入。都市部と農地や森林などの土地利用を区分。開発を認めない郊外部と都市部を明確に分け、都市部に機能が集中するように効率的に整備を進める。

B－3、公共交通ネットワークの再構築とまちづくり

福井は公共交通のインフラは他地域に比べ、充足している状況にある。しかしモータリゼーションの進展により、バスの路線は廃止、本数の減少が加速し、鉄道においては、歩道幅員の確保のため、複線だった鉄道路線の単線化などが進み、コンパクトシティ政策とは矛盾する事業も進められている。

過去の関連調査から福井都市圏では他地域と比べ、歩くことが非常に少ない地域であることが明らかとなっている。人口減少、高齢化が進むなか、福祉政策や交通事故による社会的損失の側面からみても、“公共交通を活用して歩いて移動する”ことを真剣に考えなければならない時期に突入している。「公共交通の本数が少ない」などが課題にあげられているが、中心部の駐車場計画とともに、現状を克服する整備（鉄道：単線路線の複線化、バス：路線の再構築など）も積極的に進める必要がある。これら既存インフラである公共交通ネットワークの再構築はコンパクトなまちづくりに非常に有効な手段である。

最後に

人口減少が加速していく中で開業が5年後に迫った今、これから10年後、20年後の県都福井のイメージを描かなければならない。

コンパクトシティ化は必須であり、それには県都の中心市街地集中と郊外開発抑制がセットになる。地元企業やスタート・アップ企業などで仕事を創出し、経済が活性化されなければUターン等で人が集まるまち、特に若者たちが帰ってくる、やってくるまちにはなっていかない。

駅周辺に「喰う」「働く」「遊ぶ」感を作り出すことで交流人口を促進し、賑わいを創出することが本提言のねらいである。

新幹線がやってくるこのタイミングこそ、県都福井の顔である駅周辺を発展の可能性を感じさせるようオール福井で臨むことを期待したい。

作成 福井経済同友会

住所 〒910-0005
福井市大手3-7-1 織協ビル5F

電話 0776-29-2220

Fax 0776-29-1380